

さすらいの隠遁者 ジャンヌ
マルグリット



小泉友美 KOIZUMI T



目次

はじめに	1
----------------	---

はじめに

さすらいの隠遁者 ジャンヌ マルグリット

この小説は、「La solitude des rochers 岩窟の孤独者」を土台としてインスピレーションを受けて、独自に創作してみた。

フランス 18 世紀のピレネー山脈の洞窟で修行する女性隠遁者ジャンヌ＝マルグリットとその霊父フランシスコ会修道士のリュック＝ド＝ブレイ神父との霊的書簡集であり、真偽の程は確かではない。おそらく架空の書とされている。

この謎めいた女性隠遁者は、フランスのイル＝ド＝フランス地域圏ヴァル＝ドワーズ県のコミューン、モンモランシー生まれで、おそらくコンデ公(ルイ 2 世 1621-1686)の母方の姪っ子で、1646 年生まれとされる。早くに母を失い、母方の叔母に育てられた。14 歳で秘密に貞潔の誓いをたて、多くの結婚話が打ちあがったが拒否し続けて、礼儀作法にがんじがらめになった生活を捨てて、ついには家出をして、ピレネー山脈の洞窟で隠遁者となった。

1669 年にパリで匿名で出版された、実在したポルトガルの受胎の聖母会の修道女マリアナ＝アルコフォアド(1640-1723)をモデルとした「ポルトガル修道女の手紙」に似ているものがある。

さすらいの隠遁者 ジャンヌ＝マルグリット

その死は突然訪れました。

斜めに、不規則に少しずつ舞い上がってゆく埃の螺旋。

リネンの薄布を通して、形よく盛り上がったすでに息を止めてしまった鼻、長い睫毛を指の腹で愛おしく撫でてゆくと、なにかしら漠然とした気持ちに襲われてしまいます。

母はもういません。

こんなに身体の内側から迸り流れてゆく涙は熱いものなのかと、息をすることも忘れて、そのいのちをよみがえらせようとする私は、本当に生きているのかしら？

白い布に覆われた胸にすがって、その鼓動に耳をあてても、しーんと虚ろな音がはねかえってくるのみです。

大理石のマントルピースから、白百合の花束の薫が懐かしい堇色の母性とともに、微かにそしてつよく混じり合って、枕元の十字架は一層輝きを増してくる。つんと鼻につくのは消毒液と、閉めきった部屋独得の黴の匂いで、大きく風にひるがえったレースのカーテンからすり抜けた影法師が、廊下、回廊、階段を通り抜けてゆきました。明るい陽の元

へと。母の死を通して教わったのは、最初の放棄です。硬直したその身体はもはや身体ではなく、魂という存在は本当にあるのでしょうか。最愛の母とのつながりもが断たれてしまって、生命の緒がぷつりと切れてしまって、言葉なく、息もなく、物的な重さをひしひしと思い知らされ、わあっと、声にならない叫びとともに駆け出すまま、冷えきった純白の大理石でできた廊下、回廊、階段を滑りおりてゆきます。初めての家出でした。何も持たずに、こころも気軽に重々しい鉄の扉を外側に押して、ただ彷徨うままに。無表情な白壁の続く路、蔓薔薇が丁寧に剪定された庭々を通り過ぎてゆくと、もうどうしようもない内面の暴力を覚えるまま、よく見られたいと思い純潔を求める気持ち、すべてを諦めたいと思う気持ち、熱望がマグマの噴火のように溢れでてゆきます。このとりとめない気持ちは、世間の嘲りをおそらく呼ぶでしょうね。

なによりも誠実であること、そして無傷の人格をカミに捧げるという、もう後戻りできないことをつよくこころに刻みつけること。それは、私にとって唯一の資産であり宝であり、大きな苦悩に寄り添うことのできる確かな拠り所です。

さまよい、さまよって、パリのノートル・ダム大聖堂の門に座りこみ、騒音に耳はつんざかれるまま、家もなくお金もない路上生活者の人々に囲まれて、祈るばかり。

母をなくしてから、すべての束縛から離れ、いままであんなに張りつめていたいのちの絆がたわむままに、この世俗から別れます。

あまりにもこの世間は、騒音、競争、気晴らしに満ちあふれ、私が求めているものとは違う気がして、自然に回帰する道こそ、離れて、わかれてそして真にいきる道であるように思えます。また、あらたなるさすらいを決意して、歩むがままに、こころおもむくままに、世間を捨てて、誰もいない静やかな場所を求めて、2年間にわたって、南へ南へと、南の地平線と金星を追い、日々変わる気候、風景、季節とともにひたすらに歩を進めました。

そして、少しずつ私のこころは、祈りと感想によって満たされてゆきました。この逃避の暮らしは、なんとおのれの意識を捨て去って、孤立させて、野生生活へと回帰させてゆくことか。なんと多くの岩から迸る清水、動物達にすれ違い、昼も夜も果てしなく、ここからの祈りを捧げながら彷徨い歩いてゆきます。

ようやくたどり着いたのは、十字架状の五角形の棘々が天上に向かって突き出した崖で、洞窟から勢いよく水が迸ってくる。

下には3つの洞窟があって、1つめの洞窟は底が果てしなく深く、寝室として使い、2つめの洞窟は日々の祈りを捧げる聖堂としました。この孤独なる生活は、深い森と茂で覆われて、この洞窟に至るまでには、なんと複雑な棘々に身を裂かれてくぐり抜けてゆかなければならない。鹿、うさぎが飛びはねて、おいしい様々な果実のなる木々助けられるまま、冬の寒さでも、決して凍てつくことのない洞窟での修行生活。

1日に1食で足り、夜は4時間の睡眠。真っ暗で深い夜の闇に怖いという気持ちに支配されていましたが、うさぎやりす達が恐れもせずに飼いならされて、少しずつ穏やかになっていった。はっきりと目覚めると、ともにすべての行動をキリストへの祈りに捧げました。

すきとおった水が迸るこの地上の楽園にて、まず聖母への祈り、そして2時間にわたる観想をする。その後、詩歌をうたい12時までなにも喋らずにいる。キリストへの偉大さ

を褒め讃えながら、ゆっくりと溪流に沿い歩いて、キリストの元に休み、そのまま摂理に身を委ねる。

休憩、損失、滅び、ひとりきりの孤独な生活、埋葬をカミへの愛の儀式のために準備して、感謝して味わってゆく。

なにもない、まったくなにもない、ただ、キリストの十字架があるのみ。わかったのは、わたし人生において、3つの十字架があって、1つめの十字架はわたしの天の夫であるキリストのために、首から鎖で下げられて胸に隠されている。2つめの十字架は、十字架にはりつけられたキリスト自身、わたしの寝室の壁に飾られている。十字架の足元に私は跪いた。3つめの十字架は、岩壁に吊るして、毎金曜日にここよりの祈りを捧げます。満天の星の輝きを指先でなぞりながら、輝くばかりの月の光で聖母マリアの木像を彫ってゆくことは、苦行生活にあって懲罰鞭を使って、小石だらけの床に両膝をついて、肉を引き裂く苦痛によって乞う赦しよりも、もっと大切なように思えます。

私は、幸も不幸も、すべてはキリストからの恩恵より来たるものと信じており、キリストにすべてを委ねて、すべての信頼をよせて、間違った道を歩めことを許さずに、光のみお与えになる。

それでも悪魔の誘惑はつよく、過去の悪夢や罪を限りなく思い出させて、魂をおもいっきり悩ませて、想像を攪乱させて、まるで私は蠟人形のように、冷たく、魂を失ったようになって、絶えないハンマーで叩き割られるようなずきずきする頭痛に悩まされる。その時、もっとも最良な薬は、かつての懺悔者のように地面に伏し、額を押しつけて、どうか私を憐れんでくださいと繰り返し叫ぶのみ。

なんと、悪魔の誘惑は、粗野で、荒々しく、猥雑なのか。

この1斤のパンは何故にキリストの肉となるのかと、何故ゆえにこの1斤の小麦と水からなるパンは聖体なのかと、ここに疑問を生みつけてゆく。それは、真っ赤な嘘であるということを私に信じさせて、力の限界を感じさせる。

疲れはてた私はただひとりきり、緑の苔萌える森の木陰に、小さな子どものように木の根元に足を伸ばすまま。頭上に広がる緑の回廊に私の顔、声、肌、言葉を透きとおらせてゆき、カミが万物を支配して、あなたの力の及ぶすべてのものを、何一つ人間である私たちは所有することができずに、聖霊のお導きによって、滅びゆくまま。枝から枝へと走りまわる小りすに導かれて、衣をまとったまま、滝の下を求めてゆく。

この滝の下、勢いよく進む水に、両掌、両腕、頭、胸、両足すべてがいきるといふカミの恩恵を感じさせてくれた。ゆっくりと両眼をつぶると、あるのは水の音、鳥の声、虫たちの囁き。両掌で水をすくい上げて、髪にかけて濡らしてゆくと、息をすることも忘れてしまつて、よみがえるのは死にゆく母の姿。

透明な見えない布で私と母の顔はおおわれてゆき、私自身もここに死にゆき、そして、生きて、気がつくひとりきり。

それは、私のいのり。

この地上の楽園は、いつしか天上の楽園へと。

これが私の物語です。

眼の前にひろがりゆく星々の囁きにゆっくりと、両目を閉じて、意識を天の父にあずけましょう。

完

さすらいの隠遁者 ジャンヌ マルグリット

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
